今月の一品 令和 6(2024)年 11 月

飯能市立博物館 きっとす 今月の一品

飯能市立博物館 Hanno Municipal Museum

センとカタ―下名栗加藤桶店資料―

飯能市立博物館 学芸職員 波田 尚大

今月ご紹介するのは、かつて、下名栗で営業を行っていた加藤桶店で使われていたセン(旃)とカタ(型)です(画像 1)。加藤桶店は 4 代続いた桶屋で、4 代目の加藤七郎氏の仕事場には桶職人の道具が並べられています(画像 2)。戦前までは、道具箱に仕事道具を入れて製作や修理の依頼があった家に赴き、その家で用意した材料を使って様々な製品を作りましたが、戦後はこの仕事場で作業をし、完成品を届けることが多かったようです。

画像 1 セン(上)とカタ(下)

画像 2 加藤桶店の仕事場

七郎氏は 15 歳から飯能市原町の「久保田桶店」で 7 年間の修業を積み、加藤桶店で働きはじめます。桶店では、木製の入れ物であればどんなものでも製作していたようで、手桶、風呂場で使う片手桶、井戸桶、風呂桶、味噌樽など、日常的に使用する道具類を製作していました。

センを使って、板を削り、桶などの側板の曲線を作り出します。桶の側板の内側を削るウチゼン、外側を削るソトゼンの二種類があり、これはウチゼンです。センである程度側板を削ったあと、カタを側板の外側に当てて角度を確認し、滑らかなカーブを削り出します。カタには寸法が記載されており、桶の直径を示しています。例えば「二尺四寸」であれば、直径約 73cm の桶の側板のカーブを測ることができます。センは購入したものですが、カタは注文された桶の大きさによって自作していました。

加藤桶店では主に名栗地域からの依頼が多く、平成 10(1998)年頃まで桶づくりを行っていたそうですが、高度経済成長期にはプラスチック製の桶や風呂などが登場し、製作や修理の依頼は減少していきました。そのため、布団の生地の製作や山の間伐、昭和 36(1961)年頃からは灯油販売など、地域の特産や需要にあわせて副業を行いながら、加藤桶店として営業を続けていました。これらの桶屋道具の一式は令和 5(2023)年 4 月、当館に寄贈され、現在整理作業を行っています。林業の町飯能にとって、欠かすことのできない資料群だと言えます。

【参考文献】

さいたま民俗文化研究所『名栗の民俗』下 飯能市教育委員会 平成 20(2008)年 3 月
福生市郷土資料室文化財総合調査報告書 第 32 集『福生の民俗 民具Ⅲ 桶屋の道具』 平成 17(2005)年 3 月